

あわら市

芦原温泉駅周辺 地域整備の提言

～和心と緑あふれる駅間空間で
北の玄関口としての品格と風情を醸し出す～

平成30年6月

福井経済同友会

1、北の玄関口としての重要性

北陸新幹線芦原温泉駅は首都圏や信越地区から福井県に来訪する人々にとって最初の駅まさに北の玄関口であり、この駅での交流人口の増減が坂井市はじめ周辺地域にもたらす北陸新幹線効果を大きく左右する。一方で、かつては関西の奥座敷と言われて賑わった芦原温泉だが、北陸新幹線開業で関東の奥座敷というイメージを生み出すことができれば大きく発展する好機でもある。

最大の課題は、

「いかに芦原温泉駅で降ろすか、芦原温泉駅から乗せるか」

現状、本県の嶺北から首都圏に向かう人の数は一日約3千人と言われ、うちJR利用者は2,500～2,600人、残りが小松空港利用者と想定されている。北陸新幹線芦原温泉駅でJR西日本が想定する乗降客数は3,700人、これを就任間もない新しい市長・佐々木氏は5千人にしたいとしている。

課題解決のその1

芦原温泉街をイメージさせる和風による統一感づくり

芦原温泉駅から温泉街が遠い印象を極力解消するために駅前空間を温泉街をイメージしやすい和風で統一し、芦原の風情を演出する。駅正面の「aキューブ及び金津本陣にぎわい広場」を積極的に活用して緑をもっと活かし、明るい・健康的な雰囲気も創り出す。周辺地域の豊富な農産物や魚介類を販売する観光市場で“食の福井”をアピールし、本県の北の玄関口としての役割を担う。

課題解決のその2

乗降客数の拡大にはビジネス利用者の取込みもポイント

長年の経験値から出されたとは言え、3,700人でも高い数字だが、ここからさらに5千人台に乗せるのはかなりハードルが高い。金沢開業時のような北陸ブームが湧き起きたとしても、継続的に高いレベルの乗降客数を確保するためには観光客だけでなくビジネスユーザーの取り込みが欠かせない。

2、課題解決のための方向性

芦原温泉駅の乗降客数の拡大には当然ながらあわら市の観光コンテンツのブラッシュアップや広域観光連携が欠かせないが、観光施策については加賀市も含めた広域連携などすでに多くのプロジェクトが動き始めている。福井経済同友会としては今回は南越駅(仮称)、福井駅に続き、「駅周辺エリアに求められる機能、役割」に絞って提言する。すでに駅周辺整備計画の立案作業が市議会等で動き出しており、緊急性も高いと判断した。

3、課題解決のための具体的方策、6策……

A, 芦原温泉をイメージする和心と風情あふれるおもてなし

B, 周辺地域の果実や野菜、魚介類を扱うコンパクトな観光市場で食の
あわら温泉を訴求する

C, 景観に配慮した駐車場の充実とその収益を活かした地域DMOによる
まちづくり推進

D, ビジネス客を狙ったビジネスホテルの誘致

E, PPP／PFIの発想で民間投資を呼び込み市財政の負担を軽減する

F, 芦原温泉駅を本県北部観光の拠点とし、交流人口を拡大する

A、芦原温泉をイメージする和心あふれるおもてなし

(1) 緑を活かし、駅前イメージを“和心”で統一感と風情を醸し出す

現状のＪＲ芦原温泉駅前が一番の問題は、ＪＲ金津駅時代からまるで時計が止まっているかのような昭和的な光景が駅に降り立つ来訪者の目の前に広がっていることである。数年前にこれではまずいと「aキューブ及び金津本陣にぎわい広場」の整備が進められたが、駅舎から見えにくいこともあり、現状の寂れ感が残念ながら変わっていない。



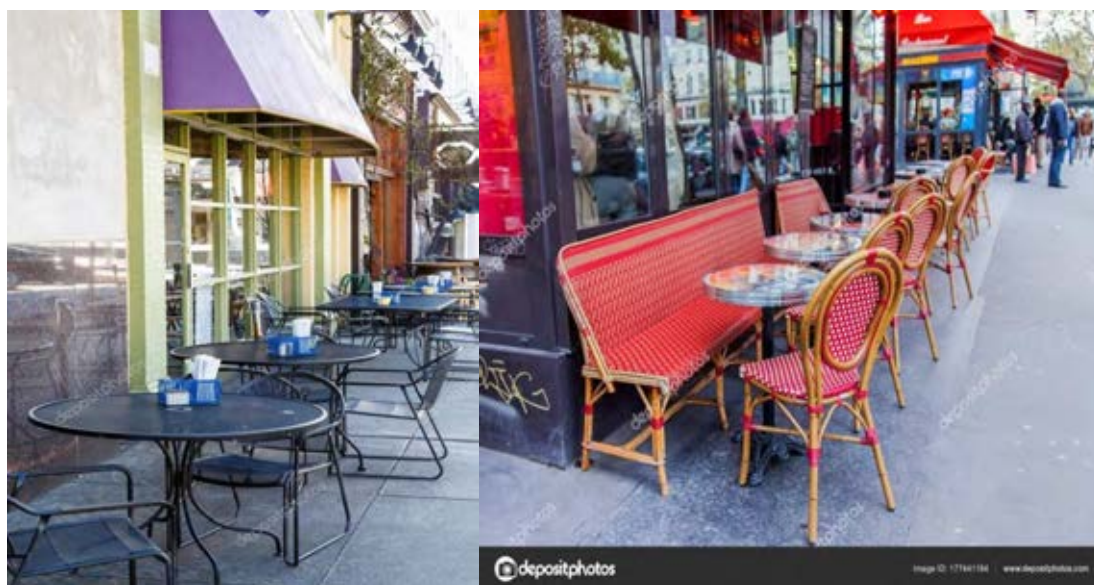
駅前の再開発計画によって「aキューブ及び金津本陣にぎわい広場」の駅側間口を大きく広げ、丁度、北陸新幹線ホームからつながってくる自由通路から降り立つ来訪者の目線に大きく緑の広場が広がるように配慮する。駅前正面の解放感が大きく違ってくる。大切なことは街の統一感、一体感であり、芦原らしい風情を醸し出すことである。そのために基本コンセプトを明確にする必要がある。我々は芦原温泉の温泉街をイメージした“和心”の感性と風情で、誘致したビジネスホテルも含めて街並みや広場を染め上げることを提言したい。

(2) 駅に着いたとたんに“和心”あふれる雰囲気温泉街のイメージを醸し出す

芦原温泉駅に着いたとたんに、旅館に到着したのではないかと見間違えるくらいの雰囲気を醸し出せるとベスト。和風の内装、畳敷きのステージ、越前和紙の壁紙や照明器具や足湯サービスや琴の音などの音楽などで、新幹線の長旅の疲れを吹き飛ばすようなサプライズ空間をつくり、これから訪れる温泉旅館の期待感が膨らむような演出で観光客を喜ばせたい。広場のモニュメントとして湯煙の演出なんかも面白いのではないかな。



駅西口を周回する歩道の活用も提言したい。行政側で法的な調整は必要となると思われるが店と歩道の間の一定幅を若干の使用料金を徴収して店舗に開放し、自由に使えるようにする。ただし、看板を並べ立てるといった利用は認めない。試食や試飲コーナーの横に濡れ縁があってちょっと一休みといったおもてなしである。好天の日はテーブルが並んで外でランチもいいだろう。そうした歩道の活用（下記資料写真参照）で街の賑わい演出に成功した都市は外国などでは多く見られる。和でイメージすると濡れ縁や縁台だろうか。



自由通路が児童の通学路にあたるところから、挨拶運動なども通じて「我が町が人間的なおもてなしを重視している」との教育効果も狙いたい。鹿児島県の指宿温泉でも、地元の高校生が駅舎で観光客に挨拶をすることで観光地の盛り上げに一役買っている。宮崎県の飫肥市でも地元小中学生の元気良い挨拶が観光誘客につながっていることなども参考にしたい。

(3)物販と飲食と観光案内の一体化（西口駅前広場に関して）

物販、飲食スペースとも、地元客、観光客、ビジネス客といった様々な客向けに芦原の素晴らしさをアピールし、気軽に利用できる形が望まれる。さほど広くないスペースを物販と飲食を明確に区切ってしまい狭さを感じさせるのは得策ではない。JR福井駅西口のハピリンにできた福井市観光物産館 福福館のように物販と飲食と観光案内を一体化したような施設も参考になるのではないかな。



コンシェルジュ対応については、年間の乗降客の変動や時間帯による繁閑に対応し、ランニングコストを抑える工夫が必要、そのためには物販と飲食と観光案内の一体化、マルチタスクを行うスタッフ教育が重要である。多くの同様な施設では、観光案内だけは別の場所と人になっていることが多いが、お客様にとってもスタッフにとっても辛い形となっている。おもてなしを標榜し

福井県の北の玄関口である芦原温泉駅では、これらの問題点を乗り越える英知が期待される。

(4)インバウンド対応に一工夫を

①免税一括カウンターの設置



北陸新幹線の延伸により大幅に増えると期待されるインバウンド客を吸引するためには、免税対応が不可欠である。その際重要なことは、改札口に出来るだけ近いわかりやすい場所に、免税一括カウンターを設置することである。POS レジの拡張機能で個々の店舗で免税対応が可能になっては来ているが、そうではない従来型のお土産屋も多い。

インバウンド客にとっては、店ごとに手間のかかる免税対応を受けるのではなく、買い物をまとめて免税一括カウンターで処理できることのメリットは大きい。芦原温泉駅に到着したときに、免税一括カウンターの存在を知ることになるので、お客様は安心して買い物ができることになる。

② キャッシュレス対応の強化

免税対応と合わせて検討したいのが、キャッシュレス対応である。中国のアリペイに代表されるキャッシュレスショッピングは、時代の潮流であり避けて通ることはできない。JR系をはじめ各種電子マネー、クレジットカードなどのキャッシュレス対応は当たり前に行うことが大切になってくる。

B、周辺地域の果物や野菜、魚介類を扱うコンパクトな観光市場で食のあわら温泉を訴求する

(1)観光市場「あわらデリシャスマーケット」の開設

あわら市から旧三国町に連なる北部丘陵地帯は、豊富な果物や野菜の産地として高く評価されている。全国的な知名度はそれほど高くはないが、丘陵地帯を貫く広域農道はフルーツラインと呼ばれ、その沿線にはメロン、スイカ、イチゴ、ブルーベリー、梨、柿などの産地が広がり、さらに越のルビー、さつま芋（とみつ金時）など上質の果物、野菜の一大産地を形成している。

こうした四季折々の豊富な農産品を高い鮮度で観光客らに提供する施設が残念ながら駅周辺にはあまり存在していない。芦原温泉駅前の土地活用検討街区（別添資料参照）の中核施設として、このような農産品を提供する“観光市場”「あわらデリシャスマーケット」（仮称：ネーミングの根拠は次項で説明）を開設してはどうか。三国漁港からの日本海の海の幸を加えてもいいだろう。よくある直売所のようなスタイルではなく、コンパクトでもいいから陳列に工夫を凝らし、思わず手にしたくなる欧州のマルシェスタイルを参考に少ないスペースをうまく生かした観光市場を目指す。（下記写真を参照）

手軽にその場で試食や食べられるイートインスペースもあっていいだろうし、国際便も含めた宅配手続きサービスにも対応する。新幹線で来福した観光客らが福井駅ではなくこの施設に立ち寄ってから帰りたいという気にさせるぐらいの施設に育てたい。農家も含めて地元の多くの方々の協力を得て観光客でにぎわう観光市場にもっていければ、駅前空間が大きく賑わうことになる。



(2) フルーツラインをブラッシュアップした「福井デリシャス街道」(仮称)

～食へのこだわりで隣接温泉地との差別化を図る～

北部丘陵地帯のフルーツラインをもっと生かして食へのこだわりを強力に売り出すべきだ。そのためにネーミングもこの際見直してはどうか。北部丘陵地帯を貫く農道は最終的には旧三国町に至る。三国港まで含めれば野菜、果物、畜産物に魚介類まで、まさに福井の食の幸の宝庫といえる“街道”が浮かび上がってくる。隣接する加賀温泉郷との差別化を図る上でもこの地域が有する食の幸を大きく打ち出した観光戦略が必要なのではないか。

あくまで我々なりの一案に過ぎないが「Fukui Delicious Way 福井デリシャス街道」あるいは街道やラインという表現は全国的に数多く存在するので独自性という観点では、日本語表記も「福井デリシャスウェイ」でもいいだろう。Wayには“らしさ”という意味もあり、食へのこだわりを強調している。

そのためにはこの街道沿いの食のポイントを徹底的にブラッシュアップし、マップ化する。農家の直売や農家レストラン・試食ポイント、いちご狩りやトマト狩りといった観光農園、とみつ金時の貯蔵庫の見学コース、スイーツ・菓子販売、農業体験、選果場や三国港市場のセリ見学といった様々視点から工夫を凝らして、インバウンドも含めた福井を代表する“おもてなし街道”を創り上げていく。その街道の起点であり、終点でもあるのが前項で開設を提案した芦原温泉駅前の“観光市場”「あわらデリシャスマーケット」である。



上記写真は県庁のホームページ掲載されている坂井フルーツラインの看板、一方で北部丘陵フルーツラインとの呼称も、民間のサイトではあわらフルーツラインとの記載もされている。ネーミングについてもインパクトのあるものに統一し、専門家によるプロデュース等も検討してみてはどうか。

C、景観に配慮した駐車場の充実とその収益を活かした地域DMOによるまちづくり推進

(1)福井市等からも利用が見込める駐車場

北陸新幹線開業後の芦原温泉駅の乗降客数を推察し、さらにそこから自家用車での利用者を想定するには難しい点は多々ある。ただ、現状の JR 福井駅の東口の駐車場の長期駐車場の利用状況、小松空港利用者の JR 利用への転換等々を考えると、福井市北部や永平寺、勝山方面から首都圏へ向かう利用者が駐車場が少ない福井駅を避け、芦原温泉駅の駐車場が整備されていれば芦原温泉駅に駐車して首都圏を目指すというケースは十分に想定される。

さらに現状の駅前のあわら市営駐車場（西口 214 台、東口 164 台）の利用状況等もからも 300～500 台程度の利用は見込めるのではないかな。開業時で 300 台確保し、状況によって 200 台を増設するということでもいいだろう。冬期の降雪を考えるとこれら駐車場は立体化するべきであろう。東口の駐車場は予備駐車場として活用する。

下の写真は利用が活発な北陸新幹線新高岡駅の駐車場。8 百台収容なのがいいが駐車場が目立ちすぎの声や将来の市財政圧迫の不安要因との声も・・・



(2)運営を地域DMOへ、収益をまちづくりに再投資

立体駐車場の場合、3百台収容の4層5段で、24時間無人営業と想定して建設費は約7億～7億5千万円前後、運営費は年間8百万円程度である。駐車場経営者らの情報によれば北陸新幹線開業後の富山・金沢の立体駐車場の売上の変化は平均で開業前の約1・6倍である。こうした専門家の見立てに従えば、現状の芦原温泉駅の市営駐車場の売上は年間約3千万円であり、価格設定にもよるが少なくとも新幹線開業後は年間4千8百万円程度の売上が見込まれ、運営費を差し引いた減価償却前利益は約4千万円程度と予想される。

イニシャルコストは行政側の負担でまかない、運営を民間に委託する。この場合地域DMOを新たに設置し、駐車場経営を委託することも検討してはどうか。DMOはこの収益を運営資金のベースとして駅前地区を中心に景観整備、商店街振興策、観光客らへの情報提供等の事業を継続的に進めていく。

(3)駐車場の配置と景観への配慮

駐車場は極力駅に近く、立体化されることがベスト。一方で立体駐車場は景観への配慮が必要でコストアップとなる。設置場所は従来からの計画にあった「aキューブ」北側街区（添付資料参照）の駐車場予定地が有力だが、駐車場の前にビジネスホテルを誘致し、立体駐車場を極力見えないようにする。同時にホテル利用者の利便性も確保してはどうか。駐車場は絶対に必要だが駅に降り立っていきなり正面に無機質な立体駐車場が見えるという構図は避けたい。

注：DMOとは

Destination Management Organization（デスティネーション・マネジメント・オーガニゼーション）とは、観光物件、自然、食、芸術・芸能、風習、風俗など当該地域にある観光資源に精通し、地域と協同して観光地域作りを行う法人のこと。

D、ビジネス客を狙ったビジネスホテルの誘致

(1)周辺企業、工場への来訪者の宿泊の期待

あわら市はもちろん、坂井市のテクノポートも含め、芦原温泉駅周辺には有力な企業が多数立地している。機械、化学、医薬品、機械部品等々、業種も多岐にわたっている。これまで首都圏や関西圏からこれら企業を訪れるビジネス客はJR福井駅、または小松空港から入ってくるケースが多かったと思われる。北陸新幹線開業後のこれら首都圏からのビジネス客は金沢回りで芦原温泉駅で乗降する可能性が高い。

これらビジネス客が宿泊しようとする現状のままでは福井市のホテルを利用するしかなくなる。一方で芦原温泉駅周辺にビジネスホテルが整備されれば宿泊を伴うビジネス客の利便性は大きく向上するし、芦原温泉駅の利用者拡大につながる。

(2)駐車場とセットでとらえ、地元商店街に宿泊客を呼び込む

前述したように駐車場の景観配慮とビジネス客の利便性を考慮して立体駐車場とセットでビジネスホテルの誘致場所を決定してはどうか。これによって立体駐車場の建設コストを少しでも下げる。したがってビジネスホテルの立地場所は土地活用検討街区よりも「a キューブ」北側街区の前面が望ましいのではないかな。

宿泊するビジネス客はできれば近場で飲食をと考えるし、さらにレンタカーなどのニーズも発生する。ビジネスホテルを誘致することで地元での消費の循環が初めて生まれる。それだけ駅前空間での交流人口が増し、観光客だけに頼らない夜の賑わいも創出できる。レンタカーショップの数も増やすべきだろう。

これら宿泊客はそもそも芦原温泉への宿泊客とはニーズも違い、これまで福井市等へ流れていた宿泊客なので温泉街と客を奪い合うことにはならないと考える。すでにあわら市には大手ホテルチェーンから問い合わせも来ているとのことだが、ホテルの規模にもよるが2件程度の複数誘致も十分に可能ではないかな。

E、PPP／PFIの発想で民間投資を呼び込み 市財政の負担を軽減する

芦原温泉駅周辺の再開発や整備の検討に際して、ひとつの重要な視点は投資効果を冷静に分析し、過大投資で将来のあわら市財政運営に禍根を残さないことである。現在、見直しが進められている「芦原温泉駅周辺まちづくりプラン」では、土地活用検討街区での再開発計画だけでも見直し前のプランでは20億円近い予算を要するのではないかとされている。あわら市の財政規模を考えればこの事業だけでも失敗は許されない事業規模であり、これに駅舎側の西口駅前広場の整備、立体駐車場建設なども含めればさらに投資する予算は拡大することになる。

駐車場経営を地域DMOに委託する案をこの提言に盛り込んだ趣旨にも通じるが、何もかも行政側で実施しようとするのではなく、まずは統一コンセプトも含めた基本計画立案づくりや一定程度のインフラ整備は行政が担い、その後は民間投資の活用も積極的に検討してもいいのではないか。例えばビジネスホテルの誘致の際に、土地活用検討街区の再開発についても抱き合わせで提案を受けたり、一部は用地買収も含めて民間デベロッパーに委ねたりした方が効率もいいのではないか。このようなPPP／PFIの発想を参考にした民間投資活用の視点もあっていい。

北陸新幹線の根強い人気、さらに政府の方針に沿って活発化しているインバウンド需要等を考えれば、芦原温泉駅前の再開発に関心を持つ民間企業、例えば大手ホテルチェーンや民間デベロッパー、さらには外食産業等々、県内企業も含めて少なからず存在すると考える。したがって地元関係者で周辺まちづくりプランを練る一方で、早い段階からこうした民間資本の協力を取り付けるべきであろう。

注：PPP／PFIとは

PPPとは、**PublicPrivatePartnership**（パブリック・プライベート・パートナーシップ）の略で、公民が連携して公共サービスの提供を行うスキームをと呼ぶ。PFIは、PPPの代表的な手法の一つ。

PFIとは、**PrivateFinanceInitiative**（プライベート・ファイナンス・イニシアチブ）の略で、公共施設等の建設・維持管理・運営等を民間部門（プライベート）の持つ経営ノウハウや資金（ファイナンス）を活用することで、低廉かつ良質な公共サービスを提供することを目的とした新しい公共事業の手法。

F、芦原温泉駅を本県北部観光の拠点とし、交流人口を拡大する

芦原温泉駅の周辺には、温泉街だけでなく東尋坊を始め、芝政、三国湊に海水浴場、松島水族館、北潟湖、吉崎御坊、丸岡城等々、有望な観光コンテンツが多く存在している。しかし、残念ながらこれら観光地は点として存在し、個別誘客に陥ってはいまいか。

これら観光地を線として結ぶ工夫が必要だ。路線バスの運行ダイヤとうまく組み合わせながら点と点をつなぐ周回バスを路線バスの本数が少なくなる土日・祝日に運行させてはどうか。芦原温泉駅⇒吉崎御坊⇒北潟湖⇒芝政⇒松島水族館⇒東尋坊⇒三国湊⇒あわら湯のまち駅⇒芦原温泉駅といったコースを設定し、時計回り・反時計回りと2本走らせる。

現在、J R 西日本が芦原温泉駅⇒丸岡城⇒永平寺の観光バスを走らせているが、周回させることで観光客の利便性を高める。一日乗り放題のお得チケットなども発行する。これらバス便の発着場として芦原温泉駅を位置づけし、交流人口の拡大を狙う。赤字の場合の補てんについては、J R 西日本や坂井市、県等の協力を取り付ければ、あわら市の負担軽減も図られるのではないか。

最後に・・・

芦原温泉のさらなる飛躍のために結集を！

関東の奥座敷とのイメージを持ってもらうためには北陸新幹線駅周辺の整備にだけに止まらず、芦原温泉そのものの魅力向上が欠かせない。近接の加賀温泉郷との競合はもちろん、北陸新幹線沿線の各温泉との競争が新幹線開業と共にスタートを切ることになる。競争激化が予想される中で芦原温泉はどう戦うのか、芦原を代表する老舗旅館「べにや」の火災消失のショックから立ち上がるためにもオール芦原で英知を結集すべき時ではないか。

実は2核型のあわら市

あまり言われてはいないが、芦原温泉駅は実質的には2核型の駅である。JR的には1核型だが、えちぜん鉄道「あわら湯のまち」駅を加えれば核は2つとなる。北陸新幹線で降り立つ客は、実際の温泉街は遠く離れていることに気がつくことになる。これをどうつなぐのか、大きな課題である。2核型の地域で双方の駅周辺が栄えた例はあまりみられず、変則的な2核型とは言え、この課題は致命的な影響をもたらしかねないと危惧される。

共同運行バスの検討を

基本的にはバスの定期運行に頼るしかないのだが、駐車場と違い、バス事業の黒字化は至難の技だろう。ただでさえ駅周辺整備で予算が取られるのに、バス運行でランニングコストが膨らむことは出来れば避けたい。芦原温泉組合、あるいは有力温泉旅館が共同で北陸新幹線芦原温泉駅と温泉街を巡回する定期バスを週末だけでも走らせることはできないのだろうか。自動運行時代も見据えた実験的な検討もあっていい。いずれにしても競争に協業を加えることで各旅館の連帯感を強めることも温泉街発展のポイントではないか。

2核の駅の一体化が市民の一体感を増す

距離はあっても温泉街と北陸新幹線芦原温泉駅は一体であって欲しい。大きな課題だが、あわら警察署の前の並木道は遠回りしてでも通りたくなる道だ。さらに大きく育てば、紅葉の季節はいずれインスタグラマーの巡礼地になろう。この並木道を北陸新幹線駅へと少しでも延ばすことはできないものか。住宅街は農地側の片側だけでもいい。せめて並木通りで2つの駅の心理的な時間軸を少しでも縮めたい。芦原温泉駅から商店街を抜け、静寂感漂う並木のトンネルを抜けると温泉街へ。同時にそのことが未だに残る旧金津町、旧芦原町という両町民意識を少しでも縮める一助となるのではないかと期待したい。



作成 福井経済同友会
住所 〒 910 - 0005
福井市大手 3 - 7 - 1 織協ビル 5 F
電話 0776 - 29 - 2220
Fax 0776 - 29 - 1380

